

保育研究をすすめるために



佃 範 夫

幼児教育を志す者として知っておかねばならないことの第一は、幼児教育のねらいは何であるかということである。勿論幼児教育にたずさわる位の者なら、そんなことはわかりきった問題であるというかもしれない。しかしそのわかりきったと思っていることが案外わかっていないものである。

この幼児教育の根本問題ともいうべき幼児教育のねらいを知るためには、私たちはまず教育史をひもといてみる必要がある。教育史の中には、私たちはまず教育史をひもといてみる必要がある。教育史の中には出てくるいくたの教育思想家の中で、何といつても幼稚園の創設者 フレーベル、ついで、ベスタロッチ、ルソー、コメニウス、デューイ、更にはソクラテス、プラトンらに教えられるところのものが多く、これらの教育思想家が述べていることから考えてみるに、幼児教育は、結局のところ教える教育ではなくして教えない教育であるといえるようである。それでは教えない教育とは一体どんな教育であろうか。これは高等学校や大学など、上の方の教育が主として知識教育であるのに対し、幼児期の教育は生活教育であ

るという意味である。幼児期の教育は望ましい環境の中で生活させることが、そのまま教育になっているという生活即教育ということろにその特色があるというのである。即ち幼児期の子どもは望ましい経験が何時でも体験出来るような環境の中で生活すると、自然と望ましい方向に伸びていくというのである。従って望ましい環境の整備こそ真剣に考えねばならない問題である。

しかもこの環境の整備は子ども達の発達段階に応じた環境の整備ということであるから、私たちは子ども達の成長発達について十分知っておかねばならない。このことが保育研究をすすめていくための第二の仕掛である。

それには身体の発育、運動・知能・情緒の発達などいろいろの問題について研究しなければならないが、これらのことについては、ウェルナー・ビューラー、ピアジェ、ゲゼル、ジャーシルド、山下俊郎らの書物にくわしく述べられている。これらの書物を通して、人間はどのような方向に向かって、どのような順序で、どのような

条件に左右されながら発達するかの様子を知ることが出来、従って幼児期に発達する諸能力の状態についても知ることが出来る。

これらの中で、特に気をつけねばならないことは、人間の才能の発達には山があつて、ある時期に著しく発達する才能も、その時期が過ぎれば衰退していくものがあるということである。例えば聴音判別の能力のようなものは、幼児期に最も発達するもので、その時期にこの種の経験をしておかないと、おとなになつてしては殆んど駄目なのである。このようなことから、幼児期に経験させておかねば後でとりかえしのつかないものをみきわめ、それを経験させるといういわゆる適期教育ということが如何に重要であるかがわかるのである。しかし、ややもすれば幼稚園教育は單なる早教育に走つたり、小学校の予備校化の危険をもっているが、決してそのようなことにならないよう注意すると共に、適期教育としての幼稚園教育に就つることが必要である。要するに私たちは幼児期に芽生えてくる才能や、幼児期に経験させておかねばならない望ましい経験についてはつきりさせておくことが必要である。また幼児教育に熱心になればなる程、子どもの精神発達特に知的発達に余りにも神経質になりやすいのであるが、全体として発達する子どもの姿を見失わないようにすることも大切である。特に幼児期は未分化の時代であり、運動能力と知的発達との間にもかなり高い相関があるといわれている。これは一つには運動能力と知能とを、それ程厳密に分けて測定することの出来ないことを示しているものである。

このように幼児期は未分化の時代であるが故に、それだけ身体の發育、運動の発達に特に注意しなければならないと思う。

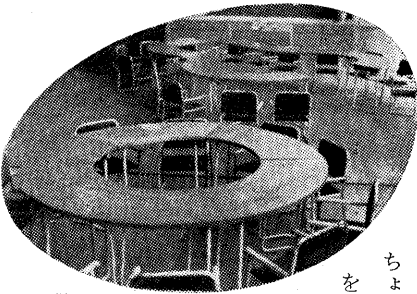
ここに保育研究をすすめていくための第三の仕事がある。すなわち生理学的立場或いは医学的立場からの子どもの理解である。従来教育がややもすれば、子どもの心的発達を中心に展開し、心的発達をさきえている身体の面については余りにも医者や生理学者にまかせて無関心であつたように思われる。私たちはもつと肉体的人間の理解を深めねばならない。特に幼児期にはそれが必要である。生理学と心理学との協働のもとにおける人間理解を基盤として、望ましい幼児教育を展開すべきである。勿論、生理学者や医者になれという意味では決してない。

以上述べてきた点を考慮して園舎の建築はもとより遊具・備品などを考え、環境を整備しなければならないが、それには創意工夫が必要である。この創意工夫が保育研究をすすめていくための第四の仕事である。遊具を作る場合にもどういう目的から作るかをまず考えねばならない。例えば大きな筋肉の発達が細かな筋肉よりも先に発達するから、幼児期には大きな筋肉を使つての運動が是非必要である。そのような運動をさせるにはどのような遊具が適当であろうか。手押車はどうだろう。これをひっぱって思いきり走らせると、大きな筋肉の発達に大いに役立つ。それには丈夫でなければならぬ。しかしそれだけでは駄目である。子どもが喜んで遊べるような構造とデザインをそなえていることが必要である。このような手順

で遊具を工夫していくのであるが、このようにすればいくらでも立派な遊具は考案されると思う。また机、椅子などの備品にしても考えればおもしろいものはいくらでも出来ると思う。数年前左図に示すように同心円を五等分した扇形の机と、デコラ張りの梯形の机を作ってみたことがある。これらはひとりごとへでも移動出来るように、足には全部パイプを使用し、それを組み合わせることによって、円、ダルマ、波形、四角など、いろいろな形が出来ることを生活の中で体験させることを一つのねらいとした。デコラ張りを作ったのは、粘土細工やその他で、机の上がきたなくなつた場合、清潔にするため試みたものである。

これらの試みは机の移動による形の変化が、自ら造形教育になるなど、予想以上の効果を収めたが、こうしたちょっとした工夫で、幼児教育の本来の姿を実現することも出来るように思う。

このような試みと共に大切なことでは、望ましい経験を具体的保育活動の中で、どのように取り扱っていくかの問題である。ここに保育研究をすすめていくための第五の仕事があり、これこそ現場の先生ならではの出来難い研究領域の一つである。即ち望ましい経験を保育の中で、どのように予



どもに経験させていくかの具体的研究である。このことについては前にも述べたことがあるが、要は遊びの中で自然と望ましい経験をしていくように、保育活動を工夫することである。私が指導している高松幼稚園で試みた一、二の例をあげてみよう。「いもほり」秋の幼稚園の遠足にいもほりを計画したことがある。戦争中ならともかくこの食糧事情のよい時に、何故いもほりなどするのだろうかという人があるかもしれないが、私はいもほりの中には教えあげることの出来ない程数多くの教育的価値を見出すことが出来る。無心に「いも」をほっている子どもの顔には何ともいえぬ期待と喜びが感じとられる。大きいもがほり出されたら子どもはどんなに喜ぶだろうか。小さいもが出たらこんどは大きいのをと、作業は次から次へと興味と喜びをもって繰り返されていく。そしてある者はほり出されたいもをかごに入れて一か所に集める。このような作業をくりかえす中に、大小比較や数教育が立派におこなわれており、手や手先きの運動の発達も促進されているのである。ただこの際計画的でなければ、十分その効果をあげることが出来ない。したがって「いも」がほり出された時に大小比較を、かごに入れて運ぶときに数教育を、という意図が計画されておらなければならぬ。勿論上から教えるはならない。更にいものつるの生えたままのところと、切りとったところと、一部分ほって「いも」がついている状態が十分観察出来るようにしたところとを作って、十分準備しておけば自然観察の単位としても立派なものである。綿羊などの家畜をいも畑

の近くにつないでおけば更によい。このような配慮のもとにいもほりがおこなわれるならば、これ程理想的教育の場はないように思う。「運動会」幼稚園の運動会の特色は一つには親子ぐるみの運動会であるということであり、一つには運動会も生活教育の一場面であるということであろうと思う。勿論それぞれの運動能力を十分に発達させることはいうまでもないことである。このような観点から、プログラムを作るとおもしろい運動会が出来る。さきに述べた私の指導している幼稚園では毎年プログラムの種目を変えているが、なかなかおもしろい種目が出てくる。その一つ二つをあげてみる。「親子競争」三つの同心円をえがき、一番外側をお父さん、次をお母さん、一番内側を子どもが走るリレー。円の大きさが違うので、お父さんもお母さんも子どもも一生懸命に走らねばならない。皆が一生懸命に走るところにこの競争のねらいがあるのであり、親が力をセーブして子どもに勝たせるといような嘘を子どもの前でみせてはならない。これをなくするために同心円を考え、親子が一生懸命走中に真の教育をもとめ、親子ぐるみの楽しい運動会をねらったものである。「くだものひろい」最初カードをひろい、そのカードに描いてある果物と同じ種類の果物を同じ数だけひろって走る競技。これは運動会も生活教育の一場面であるということから知的問題を遊びの中にとり入れてつくった競技である。この際幼児期の子どもは具体的であるが故に果物は実物であることが大切である。実物の柿を三つ、りんごを四つというようにひろって

るうちに知的発達もすすめられていくものである。幼稚園の運動会は生活教育の場面であり、ただ走ったり遊戯をしたりすることだけが運動会ではないことを知らせるために考えたものである。「野こえ山こえ」川を渡ったり、野原をころがったり、小さい山をこえるという遊びを通して身体の平衡感覚・柔軟性・跳躍力をねらった競技。このようにただ走るだけということを排して遊びの中で自然と各種の能力が発達するように考えたものである。このようにちょっと工夫すればいくらでも理想的に保育活動を展開することが出来るように思う。結局は教師の創意工夫が大切なのである。

さて、幼児教育を望ましい方向に進めていくためには、人間関係の研究とマスコミの研究が次に必要である。これが保育研究をすすめていくための第六の仕事である。幼児期はフロイドもいっているように性格形成にとって極めて重要な時期であり、この時期における親や教師と子どもとの人間関係は子どもの性格に極めて大きな影響を与えるのである。この人間関係については最近特に注目されてきたが子どもを正しく伸ばしていくためには何と云っても子どもをとりまく正しい人間関係が必要である。更に私たちは子どもたちに直接間接に影響を与えているマスコミを無視するわけにはいかない。ラジオ、テレビなどのマスコミの中で子どもたちは生活しているのである。従ってこれらマスコミの影響についての研究が必要である。私たちは幼児教育のあるべき姿を求め、その表現にむかっただえず努力していきたいものである。

(香川大学)